伊丹公論
復刊
第3号
通巻22号
発行所
伊丹市立図書館ことば蔵
伊丹市宮ノ前3-7-4
☎072・784・8170
編集
伊丹公論編集委員会

官兵衛ドラマで伊丹沸く

NHK大河スタート

NHK大河ドラマ「軍師官兵衛」の放送が1月5日、スタートした。伊丹は官兵衛が幽閉された地として知られるが、今後放送されるそのシーンが、どのように描かれるのか、また有岡城主、荒木村重役の田中哲司、絶世の美女だったという妻、だし役の桐谷美玲がどのような演技を見せるのか、今から楽しみである。本市では、「いたみ官兵衛プロジェクト」が昨年から官民挙げて繰り広げられ、市外の若い歴女や老歴史ファンが有岡城跡などを訪れるケースが徐々に増えてきた。市内には名所旧跡だけでなく、おいしい料理や酒を楽しめる店も多い。「おもてなし」の心で迎えたい。（2面・3面に関連記事）

伊丹は官兵衛幽閉の地

黒田官兵衛（1546～1604）は播磨国姫路城主の嫡男として生まれ、22歳で家督を継いだあと、羽柴秀吉に仕え、戦の指南や他大名との交渉などに手腕を発揮、「天才軍師」とうたわれた。「酒は呑め呑め呑むならば…」の黒田節で有名な九州・福岡藩（黒田藩）の祖。本名は孝高（よしたか）、出家後は「如水（じょすい）」と名乗った。

官兵衛にとって伊丹は、人生最大の試練の地であった。以下は、伊丹市教委・小長谷正治副参事による解説。

＊　＊

天正6年（1578）10月、それまで信長の家臣として三木城攻めなどに加わっていた荒木村重が突如、毛利氏、本願寺と手を組み、信長に叛く態度を明らかにした。そのころ、播州・御着（ごちゃく）城主、小寺政職（まさもと）にも村重から毛利へ味方するよう誘いがあり、政職の心は毛利へと動いていく。

官兵衛は政職の重臣である。嫡子、松寿丸（後の長政）を信長のもとに人質として差し出していた関係から、主君の政職が信長を裏切れば、我が子を危険にさらすことになった。政職には信長方についてもらわねばならないが、政職の態度は村重が再び信長に属すのであれば、思い留まろうというものであった。そのような事情があって、官兵衛は有岡城へ向かったのである。

そして、そこで待っていたのが幽閉であった。

官兵衛が救出されたのは、有岡城が信長の手に落ちた翌年の11月、実に一年余りを幽閉されたことになる。このあたりがドラマでどう描かれるのか、伊丹市民にとって関心事であろう。ドラマの主人公、官兵衛を牢につないだ悪人と描くか、解き放てば信長方として敵対することになる官兵衛を殺さず生かしたことを人間的に描くのか、歴史の見方はそれぞれである。

黒田如水像
（福岡市美術館所蔵（黒田資料））

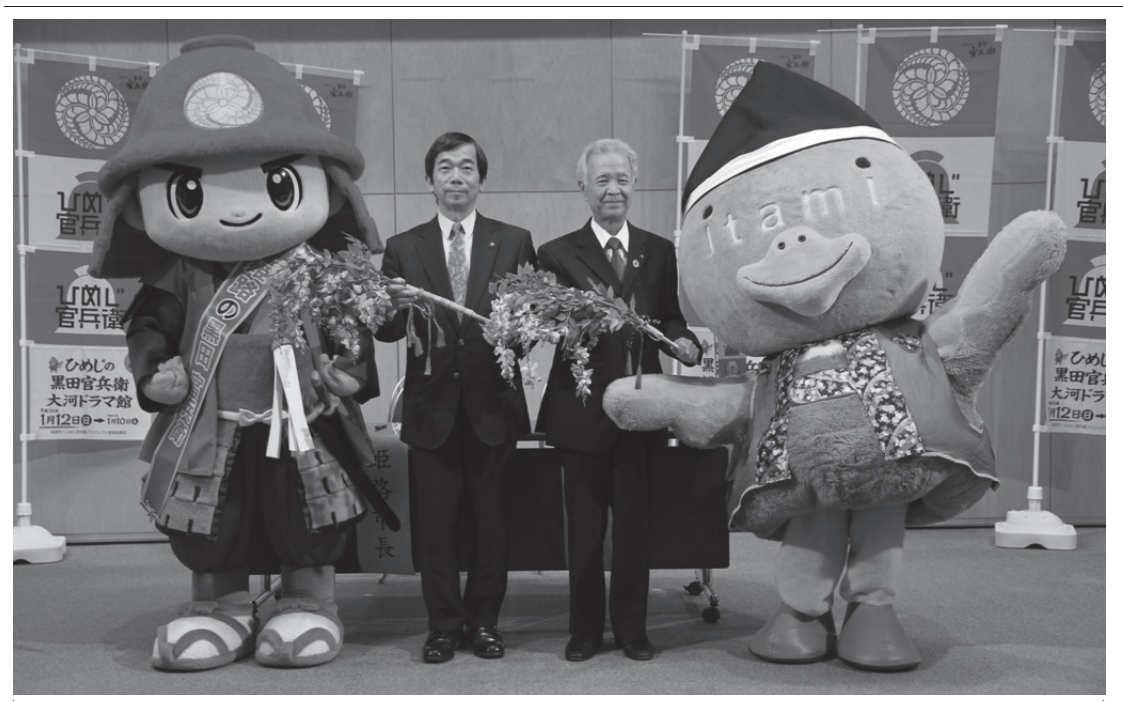
太平記英勇伝荒木村重
（伊丹市立博物館所蔵）

さて、ドラマの配役が決まった。村重役は田中哲司、村重の妻だし役は桐谷美玲という。芸能界に疎い小生にはどれほどの役者か見当がつかないが、主人公が一年余り幽閉された有岡城のシーンが1話で終わるとは思えないし、有岡城での登場人物が村重とだしの二人とも思えない。

そこで、有岡城で登場しそうな人物を紹介しておくことにしよう。

村重には村氏（20）という弟がいた。妻は吹田因幡守の15～16歳の娘で、村氏は入婿になって吹田を名乗っている。16～17歳の妹には鴨塚砦（ひよどりづかとりで）の守将野村丹後守の妻がいる。村重の子には尼崎城主の嫡男村次、池田隼人介に嫁いだ娘（15）などがいる。村重の妻だし（21）については、女房や妾と記す史料もある。立入宗継の記録によれば、年齢を24とし、楊貴妃に例えられるほどの美人と記している。本名は「ちよほ」で「だし」と呼ばれたのは、城の大手のだし（出し）に住まいがあったからという。出しは城の「出丸」のようなもので、有岡城で言えば、今の荒村寺付近にあった「一之丸金之間」辺りかと思われる。だしは、大坂の川なう左衛門尉の娘で、二人の妹も荒木越中守の女房（13）、牧佐兵衛の女房（15）となって有岡城にいた。

紹介した人物のうち、村重と村次の他は落城後に京の六条河原で首を刎（は）ねられた。カッコに記した年齢は享年で、いずれも10～20代の若さである。だしの最後は、「帯を締めなおし、髪を高々と結いなおして、小袖の襟を押し退けて尋常に切られた」という。華々しく躍動する戦国時代、その裏で見事に散っていった一族の女たち、その事も忘れてはならない。


「姫路市伊丹市　友好交流協定」を締結し、両市のマスコットキャラクター「かんべえくん」「たみまる」と一緒に記念撮影する石見利勝・姫路市長（右）と藤原保幸・伊丹市長=平成25年11月1日、姫路市で

第2回

小西酒造社長特別寄稿
伊丹と酒造業の歴史

小西　新太郎（こにし　しんたろう）
1550年創業。日本の代表的な老舗、小西酒造㈱代表取締役社長

技術革新重ね発展

今回は伊丹と酒造業との係わりを歴史的側面から述べさせていただきます。

まず既にご存じのこととは存じますが、平成25年9月26日に伊丹市議会で「清酒発祥の地伊丹の清酒の普及の促進に関する条例」が全会一致で可決され、10月1日より施行される運びになりました。古来より伊丹は交通の要衝であり、また僧行基が活躍した時代から猪名川と武庫川に挟まれた肥沃な土壌に恵まれて稲作も盛んであり、尚且つ豊富で良質の水・気候風土にも恵まれた土地であり、清酒業の基本要素として必要なものが全て網羅されていると言えます。現在の伊丹の西側に位置する鴻池村で語り継がれてきた清酒の原点とも言える逸話に「小僧さんがいたずらで灰をお酒の樽の中に投げ入れたところ『澄み酒』になった」とあります。

◇　◇

伊丹の清酒業を語る時にその技術革新の歴史に触れずにはいられません。伝統企業の「伝統とは革新の連続である」という言葉の中心を成すのが技術開発であります。「濁り酒」から「澄み酒」に至るまでには、今では当たり前になっているすべての原料米を精米してお酒を造る技術が「伊丹諸白」として広辞苑にも採録されている精米技術が重要になります。また臼を使い足踏みで精米をした時代から、効率良い水車による精米が伊丹でも実行された歴史が今でも残っております。

当時の酒造技術では難しい、冬の間に酒造りをする「寒造り」が四季の中で一番よいお酒が出来ることも伊丹で検証されておりました。また忘れてならないのがお酒の造り手の匠の技を育んできた杜氏制度であります。丹波杜氏を中心にした蔵人は「野を越え山を越え」伊丹の地まで来てもらっていました。米作りと同時に酒造りを熟知した杜氏の技は今も社員杜氏に引き継がれています。江戸時代において伊丹の酒が江戸で珍重された大きな理由の一つは長旅でも劣化しない「生酛（きもと）造り」であると言われており、蔵付き酵母の原型は伊丹で開発されております。

江戸時代ばかりでなく、明治以降の清酒業における近代化の中でも伊丹は大きな役割を果たしました。新しい機器類や技術を十分に使いきれなかった時代を最新知識の醸造技師を招聘して乗り越えたのが伊丹の酒造業であります。

◇　◇

伊丹の酒造業に大きな影響があったのは、伊丹が近衛家の所領であったということであります。幕府の管轄下になく、武家が統治していなかった為に、他所よりはお酒を自由に造れる「勝手造り」が許されていたことも伊丹の酒造業の繁栄の一つであると言えます。今では伏見の酒が京都のお酒と言われておりますが、往時は伊丹の酒が京の都、洛中洛外で人気のあったお酒でありました。同じく「くだらない」という言葉の語源にもなっている上方から江戸への「下りもの」の代表的なものが伊丹の酒でありました。

次に先人の知恵について触れさせていただきます。これらの知恵は、まだ学問として確立して100年も経たないマーケティング理論にも匹敵するものが伊丹の酒造業の中にあったことです。一つに大消費地である江戸を重要視して、いち早く江戸店を設置し、販売を重視していたということ。次に「物流を制するものは・・」という言葉がありますが、樽廻船を活用するだけでなく、自ら廻船問屋も営んできた歴史。それに今でいうアウトソーシングを杜氏制度という形で実践していたこと。等々昔の人の知恵に只々敬服するばかりであります。

阪神・淡路大震災を経験した我々は、自然災害を乗り越えてきた先人たちの努力と知恵に歴史の重みを感じてまいりました。すべてのモノを有効に活用し、尚且つ米糠から酒粕まで捨てるものもほとんどない清酒造りは、自然と共存する現在にも通用する究極のエコ産業であり、これも460年以上に亘って継続している大きな要因であると考えます。

伊丹と共に発展してきた酒造業の歴史には、文化的な功績も多く含まれています。次回にはそのことにふれさせていただきます。

官兵衛・村重関連商品を開発

市立伊丹高校商業科

体験型実践教育の一環で

市立伊丹高等学校商業科では、地元の企業、自治体、地域住民等との連携をとり、様々な体験を通して、社会につながる力を育てる取り組みを展開している。これは「起業家精神」と「起業家的な資質・能力」を持った人材を育成することを目標としたものである。「起業家精神」とは、自立性、チャレンジ精神、創造性、積極性、探究心であり、「起業家的な資質・能力」とは、自己責任で決断する能力やリーダーシップを発揮する能力、コミュニケーション能力、情報の収集・分析能力とそれに基づく判断力、問題解決能力、行動力である。

その取り組みとして、一昨年から市高オリジナル商品開発に取り組んだ。市場調査から消費者ニーズをつかみ、新商品の企画を立案し、積極的に地元の製造業者へ新規開発の提案に出かける。そこにはゼロからものを創り出す創造性や企画力が必要であり、自らの企画を実現させるために、製造業者へのプレゼンテーション能力やコミュニケーション能力が求められる。また、伊丹のお土産品として愛される商品、地域PRに役立つ商品作りを目標としており、地域の産業、特産物など、地域研究は欠かせない。まさに自らの創造をカタチにする達成感や充実感を体験できる機会となっている。

一昨年は、伊丹の誇る酒造業にスポットを当て、酒粕を使用した和洋菓子の開発に成功した。昨年からは、今年のNHK大河ドラマ「軍師官兵衛」の放映にちなみ伊丹市が展開している「いたみ官兵衛プロジェクト」に協力したいとの声があがり、「黒田官兵衛」や「荒木村重」関連商品の開発に取り組み、煎餅、マドレーヌ、フィナンシェなどの開発、販売を始めた。

また、昨年8月には伊丹中央サンロード商店街内の空き店舗を利用して「Shop市高」を開店し、開発商品を生徒自ら販売した＝写真。この商店経営実習は、一定の営業期間を通じて、いかにして効率的に商品を販売し、より利益をあげることができるのか、日々のマーケティング活動の中で学んでいく取り組みである。売り上げが販売計画通りに伸びないときは、販売方法や陳列方法を工夫したり、ポスターや口頭で商品説明をしながら他の関連商品を勧めたり、広報活動に力を入れるなど、まさに試行錯誤することでマーケティング能力を体験的に身につけている。また単に利益を追求するだけではなく、自分たちの活動のPRや、顧客満足を追求する姿勢も忘れない。

本校の商業教育は、単に商取引の方法を学び、有能な会社員を育成するだけではない。今まで考えられなかった新しいことに挑戦し、行動し、人を動かして新しい市場を作るという「市場創造型」の人材育成を図ることを目標として日々取り組んでいる。

（市立伊丹高等学校教頭　井上仁志）

平成いたみ八景❸

伊丹版「哲学の道」

日本ウオーキング協会が選定した「美しい日本の歩きたくなる道」500選に荒牧バラ公園から「水とバラの道」が選ばれている。この「伊丹緑道」は伊丹台地の東側に沿って、猪名野神社から国道171号までのおよそ1・2キロであるが、途中旧西国街道と交叉している。交叉地点は街道も伊丹坂と呼ばれる急勾配でかつては西へ急ぐ旅人達はこの坂を前に木陰で一休みしたことだろう。更に100メートルほど神社の方へ進むと、側に四阿（あずまや）があり、左側の伊丹トンネルの上からは空港から離陸直後の航空機を眺められるビューポイント。

さらに進むと右側に白洲次郎の父文平の建てた白洲邸跡の碑がある。白洲正子自伝によると台地の上に約4万坪の邸宅があったとのこと。発音寺の下の方の竹林は無くなって明るくなっているが、依然としてその辺りにはクスノキの巨木が幾本もそびえ、エノキ、クロガネモチ、ヤブツバキ、タラヨウ、アラカシ、ムクノキ、サクラなどいろんな樹木が生い茂り、小鳥の鳴き声を聞きながらの散策はまことに楽しい。

また四季を通じて樹木の観察にも多くの市民が訪れている。伊丹坂を少し下った所に多田街道と旧西国街道の交叉する「辻の碑」や西に少し登った住宅地にある「伝和泉式部の墓」などの文化財を訪ねることもできる。

ウオーキングや散策に人気の「伊丹緑道」は市民によって八景に選定された。

（いたみアピールプラン推進協議会会長　山元龍治）

＊次回は「伊丹酒蔵の夜景」を紹介予定

無料で史跡を案内

文化財ボランティアの会

「軍師官兵衛」人気で市外からの来訪者が増えているが、本市には無料の史跡ガイドの制度があるのをご存知だろうか。伊丹の史跡巡りをしたいという人がいたら、この制度をご利用いただきたい。

伊丹市文化財ボランティアの会（事務局・市教委生涯学習部社会教育課）が行っているもので、案内コースと主な訪問地は次のとおり。

【Aコース】有岡城跡、荒村寺、三軒寺、伊丹郷町館、猪名野神社【Bコース】猪名野神社、伊丹緑道、辻の碑、伊丹廃寺【Cコース】博物館、旧西国街道、昆陽寺【Dコース】昆陽池、鴻池神社、慈眼寺、鴻池稲荷祠碑【Eコース】御願塚古墳、都市景観形成建築物、須佐男神社、南野神社【Fコース】有岡城跡、加茂神社、春日神社、松源寺、スカイパーク

利用条件は、5人以上のグループで2週間前までに申し込むこと。ガイドは水・木・金・土・日曜日の午前・午後いずれかの2時間まで。

申し込みは同ボランティアの会ホームページに掲載されている受付票に必要事項を記入してファックスで社会教育課 FAX 072・784・8083へ。

問い合わせは同課 ☎072・784・8090へ。

蔵出しニュース

帯の出来栄え競う 第1回帯ワングランプリ

ことば蔵はこのほど、自分で考えたキャッチコピーやイラストなどを記載したオリジナルの本の帯の出来栄えを競う「帯ワングランプリ」を開催した。市立西中学校の授業で行っていた「帯作りコンテスト」を参考に初めて開催したもので、帯作りを通して、本に親しみ、豊かな表現力を養ってもらうのが目的だ。

昨年7月1日から9月29日まで募集した結果、370作品の応募があった。発想豊かなイラストが描かれた帯や布・フェルトを使った帯など「思わず手に取りたくなる」帯が集まった。これらの作品の中から4作品がグランプリとして選ばれ、12月1日に表彰式が行われた。

最優秀賞「伊丹本屋大賞」に選ばれたのは市立西中学校1年、武田百々花さん（13）の作品「キリエル」＝写真。武田さんは「自信がなかったので驚きました。書店に並べられ、お客さんに帯を見て読んでみたいと思ってもらえたら嬉しいです」と話していた。この作品はJR伊丹駅前の「ブックランドフレンズ」で12月16日から展示され12月23日から本に装着され販売された。

他の入賞作として「市長賞」には市立南中学校3年、田﨑悠大さん（15）の「永遠の0（ゼロ）」、「教育長賞」には同じく南中学校3年、古本穂乃佳さん（15）の「オーデュボンの祈り」、来館者の投票で決まる「ことば蔵賞」には村上有紀子さん（45）の「100円商店街の魔法」がそれぞれ選ばれた。

2月23日に ATE−1グランプリ

伊丹の地酒に合う酒の肴は？「あて」のコンテスト「ATE-1グランプリ」の決勝大会が、白雪ブルワリービレッジ長寿蔵で開催される。

決勝大会では、1月末までの一次審査を通過した上位5店舗の自慢の料理と今回のテーマ酒「老松吟醸」を味わい、気に入った「あて」に1票入れる。貴方の舌でじっくり採点を!

2月3日（月）より、一般審査員の募集開始。

参加申込・問合せは、NPO法人いたみタウンセンター☎072・775・6727へ。

決勝大会日時：2月23日　1部：午前11時30分～、2部：午後1時30分～（一般審査員:各回50名・先着順）
3部：表彰式 午後3時15分～（予定）

この印刷物は5000部作成し、印刷経費は1部あたり15円です。

郷土土産品紹介

土産に村重商品はいかが

伊丹を訪れる人や伊丹を紹介する人にとって、気軽に渡せるお土産にはどんなものがいいだろうか。「いたみ官兵衛プロジェクト」で脚光を浴びている荒木村重関連商品もいいかもしれない。

まず、茶人村重に焦点を当てたものとして、サンブレッド（JR伊丹駅前）の「村重抹茶（二代目）」。和風のパンである。抹茶餡と隠し玉の具、もちもちとした食感、ボリュームのあるサイズが、豪快に「村重」を主張する。白い生地にだし昆布の「二」で刀傷に見立てた演出も洒落ている。（村重の妻は「だし」という名）。

続いて、チョコの製造販売を行うマシュー（口酒井）から「抹茶チョコレートボール」「抹茶アーモンドチョコ」。ミルクチョコ、アーモンドチョコを抹茶でコーティングし、滑らかな舌触りが嬉しい。工場の直売所には沢山のチョコがあり、どれを選ぶか苦労しそうだ。取材のときも、若い家族連れで大いににぎわっていた。

三喜屋（野間）の「抹茶せんべい」は大人の味である。抹茶がたっぷりと塗られ、甘苦く、なかなか面白い。

お茶のみどり園（西台）からは、抹茶風味の「村重飴」。飴の味もさることながら、オリエンタル・エキゾチックな缶がセンスの良さを感じる。

抹茶以外も紹介しよう。伊丹酒として名を馳せた日本酒はどうか。伊丹老松酒造（中央）の「伊丹郷」は、村重たみまるのユーモラスなラベルが特徴だ。麹ともろみの両方に精白米を使用する「諸白（もろはく）仕込」をその名に冠する「伊丹諸白純米吟醸」は小西酒造（中央）の酒、どちらも旨い。

中満（宮ノ前）は、「あっぱれ村重まんじゅう」。酒まんじゅうの餡がつぶ餡になっており、姉妹品の「酒の露」とはちょっと違う食感で、セットで揃えてもいいだろう。村重の焼き印が手作り感を醸し出す。

今回取り上げたもの以外にも沢山の「村重」土産があるので、是非探してみてほしい。

ブームに乗った一過性のものではなく、茶人として長く生を全うした村重のように、後世に残るよう頑張ってほしい。

（齋藤芳弘）

現代人物風景

おもてなしの達人

伊丹市文化財保存協会 田村ひで子さん

写真協力＝西田写真館

みやのまえ文化の郷にある旧岡田家住宅は江戸時代に建てられた町家である。その兵庫県最古の店舗と現存する日本最古の酒蔵は平成4年、国の重要文化財に指定された。そこを見学に訪れる人を毎日笑顔で迎え、伊丹の歴史や酒造り等の説明をするのが田村さんである。伊丹公設市場内の惣菜店を35年間夫婦で営み、店をたたんだ後、縁あってこの仕事に就いた。

それまで伊丹の歴史に関心がなかったが、博物館の先生がする説明を自然に覚え、その話を見学者にして喜ばれたのをきっかけに歴史を学び始めた。伊丹検定にもチャレンジし、連続して10位内に入る程に知識が増えていった。

「北海道から来た人には男山（日本酒）の話を、大阪から来た人には鴻池家の話をするなど、興味を持ちそうな話を相手に合わせて出来るようになってきました。来た人が喜んでくれると嬉しい」と笑顔を見せた。

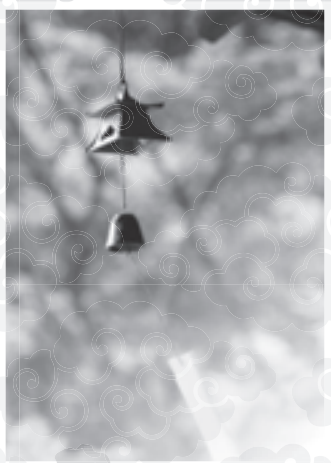
人と話す事が活力の源で、嫌いな人に出会った事がないという。人が大好き、そして歴史ある伊丹が大好き、と語る田村さん。

毎日わざわざ通勤途中に立ち寄る人達もいるという。間違いなく田村さんのファンだろう。ここに来れば伊丹の知識が増えると同時に元気をもらえること、保証します。

（村上有紀子）

郷土史こぼれ話❸

梶井基次郎がみた伊丹



教科書に載った「檸檬」の作家梶井基次郎。そのレモンの漢字はすぐには書けない。瑞々しい感性の文章は、現代であれば芥川賞作家ものだろう。昭和5年（1930）、結核療養のため伊丹の堀越町・千僧へ住んだ。在住1年半、伊丹の風景を日記や書簡に残している。

「まず第一印象。伊丹というところは田舎で古風な町だが、空気周囲はいい。古物屋にゲテモノがあって、紙宵屋のような人相の面白い連中が集まってガヤガヤやっている。（ここはなんでも買いたくなるほど安い。）

そして千僧村の様子。（人跡実に稀な土地に来てしまった。）空が広い。真一文字に刷毛で刷いたような雲が奇麗だ。安楽院の隣の一軒家でとても寂しい所。交通は阪急伊丹駅から香露園行きのバスで昆陽で下車。そこから歩いて十分。蚊が多いので蚊帳を買った。イチゴ・トマト・水蜜桃が安くて美味しい。ぜひイチゴ狩りに来てほしい。マムシが出る。道端に死んでいるのをこっそり持ち帰ってもらって焼いて食べたらすごく家人が嫌がった。月の夜電灯を消すと、庭には黒い樹木の影、光っている南天、バランの葉、置き忘れたスコップの金具。」彗星のように光り輝いた人が、伊丹にいた。

（郷土史研究家　森本啓二）

老舗探訪

ヘアーサロンオオヤマ
〒664-0851
伊丹市中央2丁目8-17　☎072-772-3606

明治4年（1871）の8月9日、「散髪脱刀令」が発布された。明治維新により江戸時代の職業階級制度が解消されたことを受け、かつての武士階級の髪型であった丁髷（ちょんまげ）を義務付けないことを知らせた法令だ。「髪結い」から「断髪」へ。「ざんぎり頭を叩いてみれば文明開化の音がする」とは当時の流行歌であったというが、ルーツをたどれば、その時代を軽々と飛び越え、少なくとも文政（1818～30）の時代までたどりつくのが理容店「ヘアーサロンオオヤマ」である。

現在は五代目の大西和男さんが経営している。「あれ？オオヤマさんじゃなかったの？」という伊丹市民の方も多いことだろう。種明かしをすると、初代の伊三郎の出身は丹波の大江山。「大江山のとこの散髪屋」が「オオヤマ」になり、そのまま屋号にしたのだという。当時の屋号は「大山館」。

小西酒造の福利厚生として、社員の散髪を請け負っていたこともある。万一、日本酒に髪の毛が入っていれば、現代のようにネット炎上はしなくとも問題であることに変わりはない。会社が費用を負担すれば、社員は必要なときに気兼ねなく髪が切れるわけだ。明治25年（1892）には国文学者の岡田利兵衛の「産毛剃り」を行った記録があるなど、伊丹の名家の御用達でもあった。

「理容店は髪を切るだけでなく、癒しの場でないといけない」。その方針を貫いた結果、三代続く顧客や、姫路市・三田市など遠方から足を運ぶお客さんがいる。

そんな理容業界も、今は美容業界に押され気味だ。

実は、それぞれの営業資格は「理容師法」「美容師法」という異なる法律に基づいている。「理容」は髪を切って整える、ヒゲを剃る業務。「美容」はパーマをあてる、髪を結う、美顔・化粧などにより美しくする業務。しかし時代が経つにつれ、両者の境界は曖昧になっている。「脂ぎったオジさんの髪を切るよりは、若いお姉さんの髪を扱いたいですよね、そりゃ（笑）」。理容店の悩みは後継者だ。

そんな中、ヘアーサロンオオヤマも手をこまねいているわけではない。次代を担う後継者候補がホームページを自作し、ブライダルをメインにしたレディースシェービングのPRを始めた。オオヤマで使用する日本カミソリ（日本刀と同じ刃構造）は、替刃カミソリと違って肌にやさしい。その女性が結婚後に出産すれば、満一歳になったお子さんの髪の毛を使った「赤ちゃん記念筆」を作ってくれるサービスもある。その子供もいつか大人になり、老後は孫を連れてくる。さて、そのときのオーナーは何代目だろう。

（満田弘樹）

昭和15年当時の「ヘアーサロンオオヤマ」（伊丹市立博物館所蔵）

伊丹俳壇

坪内 稔典 選

最優秀賞

ののけが集うわが家のお正月

平岡　恵佳（大阪府三島郡島本町）

「お正月」は正月の神さま（歳徳神）が家においでになっている、それで玄関に注連飾りをします。注連飾りは神がここにおいでですという聖域標示です。その正月の神からいただくのがお年玉、お年玉は1年間の幸せの結晶です。また正月の神さまと一緒に雑煮をいただきます。言うまでもないのですが、正月がめでたいのは正月さまという神がおいでになり、幸せをもたらすから。さて、今回の入賞句ですが、最優秀句の「もののけ」は正月の神さんの一種なのでしょうか。酔っ払いの親戚や知人かもしれませんが、なんとなく正月さまの陽気な風情。楽しそうです。

優秀賞

正月や則天去私と自問する
鳥越　世史子（伊丹市）

白味噌の雑煮に馴れてともしらが
稲本　真由美（伊丹市）

昆陽池に鴨の集まるお正月
渡邉　美保（伊丹市）

村重の話をしようお正月
諸富　千歳（伊丹市）

お正月本のおせちのことば蔵
蔵　鉄男（伊丹市）

「伊丹公論」名物コーナーの「伊丹俳壇」。
今号の発行が1月ということで、兼題は「正月」。正月らしい数多くの応募があった。遠方からは、埼玉県や島根県からも応募があり、「伊丹俳壇」が全国に広まりつつある。
次回の兼題は「風」。
募集期間は1月31日から3月16日まで。最優秀賞には図書券3千円進呈。
左のQRコードを利用するとケータイから投句できます。
問い合わせは伊丹市立図書館ことば蔵へ。

坪内稔典プロフィール
愛媛県出身。立命館大学卒。2001年、第9句集「月光の音」で第7回中新田俳句大賞スウェーデン賞を受賞。2010年、「モーロク俳句ますます盛ん俳句百年の遊び」で第13回桑原武夫学芸賞受賞。佛教大学教授、京都教育大学名誉教授。柿衛文庫也雲軒塾頭。第2回ひがし商店街五七五大賞選者でもある。

タンジョー先生はやしやよい

林やよい…伊丹市在住。
大学4年生の息子、20歳の娘の母。
毎日新聞阪神版にイラストエッセイ「くるまいすまいる」を連載中。

「持っている」子だった

元コーチが語る「マー君」秘話

小学校6年生時代のマー君（右）と坂本勇人選手

昨年最も注目された伊丹出身の有名人といえば、言うまでもなく田中将大投手（楽天）だろう。シーズン成績は24勝無敗1セーブ。最多勝などプロ野球のタイトルを総なめにした。前シーズンからの28連勝とポストシーズンの2勝を加えた30連勝がギネス世界記録に認定されるというおまけ付き。メジャーリーグの名門ニューヨーク・ヤンキースへの移籍も決めた。

この「マー君」が小学生時代に所属していた「昆陽里タイガース」でコーチとして指導した白井良夫さん（52）＝山田2＝に当時のことについて聞いた。（取材は昨年11月26日）

―小学生時代のマー君の印象は

当時、体は大きい方ではなく、丸顔なことから、チームメートに「ジャガ」（ジャガイモの省略）と呼ばれていました。エースだった坂本勇人選手（巨人）と比べると、あまり目立たなかったですが、非常にまじめな子という印象でした。

―選手としての特徴は

長打力があり、打順は5番でした。バッティング練習では、4番だった坂本と飛距離を競い合って、校舎の窓を割ることもありました。そして、当時から強肩でキャッチャーをしていました。ただ、走るのはあまり得意でなく、ランニングでは後ろの方を走っていました。

―「マー君、神の子、不思議な子」と野村元楽天監督が表現しているが

当時から、「ここぞ」という時に打席が回ってくることがあり、何か「持っているな」と感じていました。中学での投手へのコンバート、駒大苫小牧高校への進学、楽天への入団、これらすべてが田中にとっていい方向に行ったと思います。

―同級生の坂本選手と比較すると

二人の性格は正反対でした。田中は不器用だけども努力家。まじめなため、エラーすると引きずってしまうこともありました。坂本はその逆で、野球センスに溢れ、何でもすぐ吸収してしまう。エラーしてもケロッとしていて、チームのムードメーカーでした。

―メジャーリーガーになるが

メジャーリーガーになるなんて、まったくイメージできない。日本でのプレーを見られなくなるのは寂しいですが、彼の夢であるメジャーリーグでの活躍を期待しています。負けず嫌いの坂本もこのまま黙っていないだろう。日本シリーズで実現した対決、次はワールドシリーズでの夢の対決を見たい。

「マー君キセキ展」開催

マー君の少年時代からメジャーリーガーになるまでを追った写真展をことば蔵ギャラリーで開催します。

期間　平成26年3月5日～3月30日（開館時間中展示。最終日は17時まで）

場所　伊丹市立図書館1階ことば蔵ギャラリー

白井 良夫（しらい よしお）
白井建材㈱代表取締役。田中・坂本選手の小学生時代のコーチ、中学生時代のPTA会長を務める。

編集メンバー募集!

一緒に伊丹公論を作りませんか？

73年ぶりに復刊を果たした「伊丹公論」。この伊丹の歴史と文化を発信する新聞を皆さんの手で作ってみませんか?参加自由の編集会議でお待ちしています。お問い合わせは「ことば蔵」まで

●2月4日（火）18：30～
●3月18日（火）18：30～
●4月1日（火）18：30～

伊丹公論とは
ことば蔵ができる100年前に、宮ノ前に私設図書館を開設した小林杖吉氏が昭和11年から昭和15年まで発行した新聞。ことば蔵では第20号から復刊させ、3ヵ月に1回発行しています。

昨年12月に行われた伊丹公論編集会議

〝三杯目〟

▼酒とCM

古い話になるが、松田聖子の歌に乗せてアニメのペンギンが酒（ビール）を飲みながら涙するというCMがあった。歌も良かったが、ペンギンがかわいくて切なくて、悲しい時の自分に重ねる人も多かった。

そう言えば、この歌の歌詞も「なつかしい伊丹だわ♪」から始まる…あっ本当は「なつかしい痛み」か…しかし、ここの会社はCMづくりホントうまいな。

▼清酒普及条例

昨年10月1日に伊丹市で「清酒普及条例」が施行された。国税庁資料によると、清酒の消費量は年々減り続け、平成22年度は年間58万9千キロリットルで平成9年の約半分、昭和45年と比較すると約3分の1だそう。「日本酒で乾杯」するのもいいが美味しく、じっくりたっぷり飲んでもらう仕掛けも必要かな。

▼三杯目のあて

清酒普及条例施行記念イベント「第2回ATE―1グランプリ」で1月は各参加店であてを食べることができた。いよいよ、2月23日にグランプリが決まる。盛り上げていきましょう!また拙者の酒のあても増える～

ときわ喜多

当たった!当たった!

元おかみの気まぐれコラム

毎年忘年会を楽しんでいる。店をやめても毎年、元常連客が集まっている。ある年、私が宝くじを一人三枚ずつ配ったが二枚残った。それがなんと、当たった、当たった!

常連さんと相談の結果、カニ鍋を囲むことに。いくら当たったかって?拾万円です。あの頃は松葉ガニ、セコガニが人気。もちろん、国内産。今は外国産が多いが。店は余りにも狭いのでセンターをお借りして三十人位だったかなあ、一人一匹ずつのセコガニ。

カニ鍋を食べるとき、私は構えてしまう、さあ食べるぞーと。何せ面倒くさい。

店に来られる人はいろんなお仕事を持つ人。おかげで昔は、お酒の中でいろんなことをお客さんと皆で話した。特に鍋を囲むことはみんな親戚みたいな感じがした。今はどうかなあ!お酒が入ってくるとカニみたいに横歩き腰をくねくねする人も。

あれから宝くじは三百円しか当たらない。人生そんなに甘くない!

（平きみえ）